自然博物館
ニュース

A·MUSEUM

vol.54
〔2008.3.25〕

ミュージアムパーク
茨城県自然博物館

ブナ林に広がるカタクリ群落

カタクリの芽ばえ

大器晩成の可憐な花「カタクリ」

４月，筑波山や吾国山（わがくにさん）などの山頂付近には，カタクリの群落がみられます。カタクリは，万葉集では「堅香子（かたかご）」と詠（よ）まれたり，以前は球根（鱗茎（りんけい））から片栗粉をつくり食用とするなど，人にとって身近な存在でした。

カタクリは，種子から発芽した１年目はニラのような芽を出します。そして，２年３年とたつうちに葉は少しずつ大きくなり，鱗茎に栄養を蓄（たくわ）えていきます。開花するまでにはさらに７～８年かかるのです。まさに大器晩成といえるでしょう。

カタクリをはじめとする春植物はスプリング・エフェメラルともよばれ，樹木が葉を展開する前の早春に太陽の光を十分に浴び，樹木の葉が開くと自らを溶かすように地下部に栄養を送り，次の春までの長い休みに入ります。わずかな期間にみせるその可憐（かれん）な姿を，今年も見逃したくはないものです。

（資料課　国府田誠一）

A·MUSEUM（ア・ミュージアム） vol.54

第42回 企画展

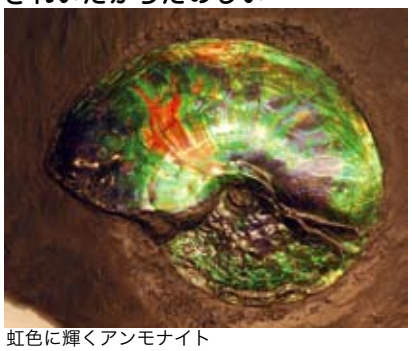
化石はたのしい！

巨大恐竜からミクロの世界まで

Fun of Fossils　*Discovery, Mystery, Beauty,・・・*

化石はみなさんにとってどのような存在でしょうか。不思議なもの，遠い昔のもの，むずかしいものなど，さまざまな印象をもっていることと思います。この企画展では，化石がもつたのしさを７つの面から紹介し，化石の世界を十分にたのしんでいただくことを目指しています。また，単純に過去のものと考えられがちな化石が，いかに私たちのすむ現代の生物たちの理解につながり，未来にまでつながっていくかという試みについても紹介しています。魅力的な化石が一堂に会したこの企画展で，ぜひすばらしい化石の世界をおたのしみください。

きれいだからたのしい



虹色に輝くアンモナイト
所蔵：(株)カナダビジネスサービス

化石の中には人の目を奪（うば）うような美しいものがあります。オパール化した貝，虹色（にじいろ）に輝くアンモナイト，透明感のある美しい琥珀（こはく）などを紹介します。

ミクロの世界がたのしい

地層の中には，肉眼では見えない有孔虫（ゆうこうちゅう），放散虫（ほうさんちゅう），珪藻（けいそう），花粉などの小さな化石がたくさん入っています。これらの化石は過去のさまざまなできごとを語ってくれます。

復元がたのしい

私たちが本や映画などで目にする恐竜の姿などは，どのような過程を経て復元されたものなのでしょうか。化石をもとに，生きていた頃の姿を復元するたのしさを紹介します。

ティラノサウルスの復元模型　　所蔵：徳川広和氏

発見がたのしい

化石のたのしさといえば，まず発見があげられるでしょう。フタバスズキリュウの発見者として有名な鈴木　直氏をはじめ，化石ハンターたちの発見にまつわるエピソードを化石とともに紹介します。

レアものがたのしい

数々の偶然（ぐうぜん）が重なって私たちの目の前に現れる化石。そんな中でもさらに貴重で珍しい化石を集めました。

ナゾ解きがたのしい

古生物学者たちは，化石からさまざまなナゾを解き明かしてきました。このコーナーでは，そんなナゾ解きの例を紹介し，そのたのしさを伝えたいと思います。

夢があるからたのしい

このコーナーでは、化石と現世の生物の研究をもとに未来の生物進化に取り組んだ国際的なプロジェクト「フューチャー・イズ・ワイルド」を紹介します。

（教育課　滝本秀夫）

２億年後に誕生していると想像される動物　オーシャンフリッシュ
Copyright©The Future is wild ™ 2008

会　　期	**2008年3月15日(土)～6月15日(日)**
開館時間	午前9時30分～午後5時まで（入館は午後4時30分まで）
休 館 日	毎週月曜 ※ただし，ゴールデンウィーク期間中の4月29日(火)～5月6日(火)は休まず開館し，5月7日(水) が休館となります。

●自然講座「福井恐竜発掘物語」

日時：３月30日（日）　13:30～15:30
場所：茨城県自然博物館内
定員：50名（先着順）　対象：小学校４年生以上
講師：後藤道治氏（福井県立恐竜博物館主任研究員）

●自然観察会「コハクを探そう」

日時：５月25日（日）　10:00～14:00
場所：福島県いわき市（現地集合）
定員：30名（抽選）　対象：小学生以上（小学生は保護者同伴）

●自然講座「フタバスズキリュウ発見の物語」

日時：６月８日（日）　13:30～15:30
場所：茨城県自然博物館内
定員：300名（先着順）　対象：小学生以上（小学生は保護者同伴）
講師：鈴木　直氏（いわき市アンモナイトセンター主任研究員）

●特別イベント「ミュージアムナイト」

日時：５月17日（土）　17:30～19:30
場所：茨城県自然博物館内
定員：100名（抽選）　対象：小学生以上（小学生は保護者同伴）
内容：企画展ガイドツアー，コンサート

※抽選のイベントは，開催日の３週間前までに，往復ハガキ又は博物館ホームページにてお申込ください。
※先着順のイベントは，事前に電話又は博物館ホームページにてお申込ください。
※１件あたりのお申込の人数は，６人までとさせていただきます。

里山の利用

里山環境学習サポート事業

当館は広い野外施設を有しており，そこには，クヌギやコナラなどからなる雑木林やモウソウチク林，マダケ林などの竹林があります。それらの里山的管理を推し進めるため，現在，炭焼き窯の製作に取り組んでいます。これまでは，雑木林や竹林で伐採した木や竹はほとんど利用されていませんでした。そこで，これらを炭にして利用すれば，里山のあり方やその維持管理に目を向ける良い機会になると考え，炭焼き窯をつくることにしました 。

炭焼き窯製作の作業は，里山セミナーというイベントを兼ね，地域で里山活動を行っている人々にも参加していただいています。これまでに４回のセミナーを実施し，環境整備，窯づくり，小屋がけ，火入れなどを行いました。今後も炭焼きを行いながら，当館の里山環境を上手に利用していきたいと考えています。

火入れ式を終えた炭焼き窯「博楽玄窯」

そして，今年で３年目になる里山環境学習サポート事業では，環境学習プログラム集「里山自然発見」を作成し，県内の小中学校に配布するなどして，身近な里山を利用した体験学習の推進に努めてきました。プログラムを使いながら里山を利用し自然に親しむことで，自然を理解し愛する人材を育成することがねらいで，今年度は「里山自然発見」に続き「里山自然発見２」を作成中です。

この紙面でもシリーズで紹介してきましたが，茨城県内には里山を利用した活動を行う団体がたくさんあります。それらの団体同士のネットワークが広がり，里山の良さや価値について多くの人々が関心をもってくれることが私たちの願いです。里山を私たちが利用することで，里山も豊かになる共生の道を歩んでいって欲しいと思います。（資料課　湯本勝洋，小松﨑茂）

県内の里山で活動する団体を紹介します！

◆立沢（たつざわ）里山の会
発　足：平成１２年１２月
会員数：３５名
代表者：鈴木　榮（守谷市御所ケ丘）
所在地：守谷市立沢字高崎（谷津田と雑木林）
面　積：約２ｈａ
動植物：ガマ，ヨシなどの水生植物やメダカ，ザリガニ，カエルなどの水生動物のほか，野鳥も多くみられます。
主な活動：平成 12 年，守谷市が募集した立沢休耕田活用事業の運営スタッフボランティアに応募した有志が中心となって結成。今まで，木道敷設，上総掘り（井戸），田んぼ再生，小学生体験学習，野草観察会，里山まつりなどを実施。特に，小学生体験学習は，今年で４年目を迎え，毎年 200 名の小学５年生が田植えと稲刈りを体験しています。これからも地域に根ざした里山づくりを基本に活動する予定です。くわしくは，ホームページをご覧ください。http://www3.ocn.ne.jp/~tatuzawa

里山まつり終了後の記念撮影（H18.5）

河豚（フグ）

コラム by director SUGAYA

今年の１月，県下でフグの中毒事故が発生し話題となりました。

さて，我国でフグを食用とする歴史は古く，石器時代の遺跡からマフグ科の骨が多数出土しています。食用として記録されているのは，奈良時代からであり，豊臣秀吉が朝鮮出兵に際し，武士の間でフグの内臓を食べ死亡者が続出し「河豚食用禁止の令」を出したのが日本で最初の取締令といわれています。現在では法令で厳しく規制されていますが，いまだに全国で死亡事故が発生しています。フグ毒は青酸カリの千倍もの毒力があり致命率が極めて高く，今日でも的確な治療法がありません。こんなことからフグを鉄砲とよぶ隠語もあります。過去において人間国宝の歌舞伎俳優や相撲取りも命を落としています。西洋では悪魔の魚として嫌われ，商業的に食べているのは日本，韓国，中国ぐらいです。

フグは種類も多く，有毒部位や毒力にも違いがあり素人料理は危険です。くれぐれも有資格者が調理した安心できるお店を利用すべきです。

イラスト：福本陽子（ミュージアムコンパニオン）

2008年3月25日発行

「新版茨城県植物誌」作成のための資料の収集及び方法の検討

近年，自然保護や環境問題に関する話題が，メディアをはじめ，地域社会，学校教育など，あらゆる場面でとりあげられています。

身近な茨城県内の植物の生育状況を把握（はあく）したい場合，その手がかりとなる代表的な文献（ぶんけん）は「茨城県植物誌」です。茨城県植物誌は，県内の維管束（いかんそく）植物の生育状況や分布を調べるのに欠かせないものです。しかし，これは，1981年に発行されたものであり，既に25年以上経過しているため，外来種や絶滅危惧種（ぜつめつきぐしゅ）等の現状とはずれが生じてきています。そのため，現在の生育状況を反映した「新版茨城県植物誌」を編集し発行することが望まれています。

そこで，新版茨城県植物誌作成に向けて，適切な作成基準，方法を検討するとともに，県内産植物標本の所在，管理等に関する情報を収集しました。さらに，植物誌作成のための基本となる仮目録及び分布図の作成を行いました。ここでは，茨城大学名誉教授鈴木昌友氏と私とで実施した共同調査の結果について，抜粋（ばっすい）して紹介します。

○他県の植物誌作成基準，作成方法の調査

他県の植物誌作成にあたった機関や担当者に，組織や調査，編集，執筆の事例を聞き取り調査しました。そして調査結果をもとに，茨城県ではどのような方法で取り組んだらよいのかを検討しました。

調査に協力していただいた機関は，埼玉県立自然の博物館，神奈川県立生命（いのち）の星・地球博物館，千葉県立中央博物館，長野県環境保全研究所，栃木県立博物館です。

○県内地域の追加調査及び標本採集

地域を絞り込んで，注目される植物の生育確認及び主な植物の記録をとるとともに，標本を採集しました。調査は，篭岩（かごいわ），男体山，八溝（やみぞ）山，花園山などで実施しました。

○茨城県植物誌作成のための仮目録と分布図の作成

当館に収蔵してある県内産植物の標本データをもとに，仮目録を作成しました。仮目録に掲載（けいさい）された植物は49,336点，2,462種になります。また，仮目録から，県内地域における種ごとの分布図を作成しました。

本研究を進めるにあたり，近県の関係機関の方々，そして県内有識者の方々には多くの情報を提供していただくと共に，御指導，御助言をいただきました。誠にありがとうございました。（資料課　国府田誠一）

大子町袋田の滝付近で生育を確認したミヤマスカシユリ

仮目録及び分布図

シカの角

小さな発見ーミュージアムコンパニオンー

（ミュージアムコンパニオン　仲川恵子）

第３展示室の入口で上を見上げると，立派な角を持つヘラジカが皆さんを迎えています。

ヘラジカはシカ科の動物です。他に角を持つ代表的な動物には，シカと同じ偶蹄類（ぐうているい）のウシ科の動物がいます（例：カモシカ）。しかし，その角の生え方には大きな違いが見られます。ウシの角には骨の芯があり，生え替わることなく一生伸び続けるのに対し，シカの角は皮膚（ひふ）が盛り上がるようにしてできたもので，骨芯（こっしん）が無く毎年生え替わります。

シカ科で角を持つのは一部を除いてオスのみです。角は毎年春になると抜け落ち，新たな角は約半年かけて成長します。

シカといえば奈良公園のシカが全国的に有名ですが，実はこのシカのルーツは鹿島神宮のシカだとも言われています。今では茨城県で野生のシカの姿を見ることはできませんが，茨城とシカの関係は意外にも古いのかもしれませんね。

第3展示室入口のヘラジカ

調査員の素顔　第1期総合調査から

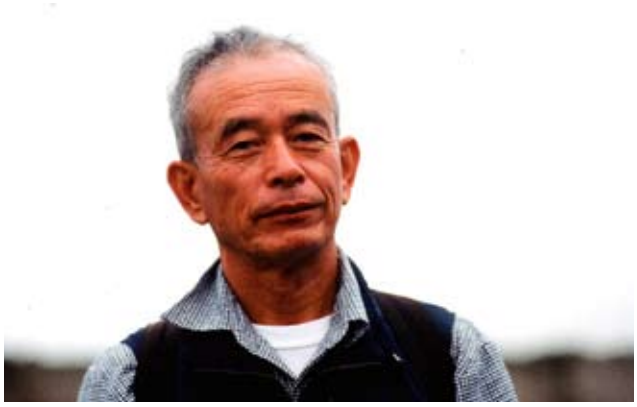
第１期総合調査では，100人をこえる調査員の方々に，茨城県の自然調査を行っていただきました。シリーズ「第１期総合調査から」の最後は，調査員の素顔をのぞいていただきながら，博物館の総合調査を振り返ってみたいと思います。調査員の方々の職業をみると，大学で“自然”を相手に仕事をしている人，中学校や高校で理科の先生をしている人，リタイヤし自然に関する調査や普及活動をしている人…，さまざまな経歴をもった方々に調査に加わっていただきました。

茨城大学名誉教授鈴木昌友氏には，調査団代表として，12年間全ての調査に携わっていただきました。多くの門下生を輩出し，調査員の中には教え子の方も多数います。現博物館職員の国府田誠一もそのひとりで，鈴木氏との共同研究では，「新版茨城県植物誌作成のための基準」を作りました。鈴木氏と共に大学時代を過ごした安　昌美氏も調査員のひとりです。安氏には，高校の先生時代から（現在は霞ヶ浦環境科学センターに勤務）植物の調査をしていただきました。「週末に山に入って調査するのが息抜き」というくらい自然と接することをこよなく愛する方です。

鈴木昌友氏

茨城大学教授牧野泰彦氏には，地層の堆積相について調査していただきました。私事で恐縮ですが，牧野氏は私の大学の恩師です。クリノメーターという地層の傾斜を測る道具がありますが，それを使って行う野外実習の経験は忘れられません。パワフルな足腰で，軟弱な学生を引き連れる姿が今でも目に浮かびます。

廣瀬　誠氏には，動物分野の代表とトンボの調査員として活動していただきました。博物館では，ヒヌマイトトンボの発見者のひとりとして紹介することが多いのですが，理科教員としても多くの後輩を指導してきました。かくいう私も，大学の卒論発表時からさまざまなアドバイスを受け現在に至り，廣瀬氏は“師”と仰ぐ存在です。茨城の昆虫誌を語る上では，本人が水戸一高に通っていた高校生時代よりその名声を博し，その当時活発な活動をしていた水海道一高の鈴木成美氏と共に「水戸の廣瀬，水海道の鈴木」と語られました。第２次総合調査では，廣瀬，鈴木の両氏に，涸沼周辺の昆虫相を調査していただきました。



廣瀬　誠氏

すべての調査員の方々を紹介できないのが残念ですが，茨城の自然を愛し，そして茨城の自然誌研究の第一線で活躍している方々に，総合調査の調査員を務めていただきました。12年間の成果は膨大です。私たちはそれを受け，次の世代に豊かな自然をつなぐ任を担っているといえるでしょう。　（資料課　久松正樹）

黄金のゲンゴロウブナ　おさかな通信

去年の11月，一般の方から博物館に「金色のヘラブナが捕れた」と連絡がありました。さっそく受け取りに行ったところ，金色に輝くフナがいました。

フナの仲間には体色が赤くなった個体がまれに現われ「緋ブナ」とよばれ，金魚の元になったと言われています。しかし，体色が黄色になるというのは，かなり珍しいのではないかと思います。

すぐにでも展示をしたいところなのですが，問題がありました。それは種名です。連絡では「ヘラブナ（標準和名はゲンゴロウブナ）」ということでしたが，フナ類は分類が難しいとされている魚のひとつで，姿形・色では判断できない場合があります。その場合，鰓にある「鰓耙」とよばれる餌を濾し取る器官の数を調べて，正確に判断する方法があります。その方法を用いて調べたところ，やはり「ゲンゴロウブナ」のようでした。こうして晴れて展示することができました。　（水系担当　石坂泰敏）

黄金のゲンゴロウブナ

アフリカ・ジンバブエからやってきたボーリングコア資料

アフリカ南部の内陸に，ジンバブエという日本より少し大きな国があります。この国には，白金やクロムなどの金属資源が眠っており，ジンバブエの経済を支えています。このたび，このジンバブエ産のグレートダイクとよばれる岩体で資源探査のため掘削されたボーリングコア資料が，茨城大学教授田切美智雄氏から当館に寄贈されました。この資料は地上から400mの深さまで円柱状に岩石をくり抜いたもので，92個の木箱に分けられて地学収蔵庫に収納されています。

〔グレートダイクとは？〕

グレートダイクはジンバブエをほぼ南北に縦断する巨大な岩脈です。この岩脈は，始生代（約24億6000万年前）にできた巨大な割れ目をマグマが埋めて，ゆっくりと固まってできたものです。その幅は3～12km，総延長530kmにも及び，その巨大な姿は人工衛星から撮影された写真でも鮮明に捉えられます。

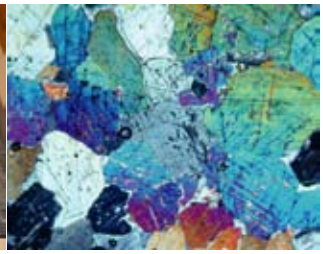
ジンバブエの位置

グレートダイクの掘削作業　（撮影：西谷義興）

〔冷えて固まるときのマグマの動きがわかる〕

海の中に砂や泥が流れ込んでくると，海の底で地層ができます。巨大なマグマだったグレートダイクも同様に，マグマの中で結晶化した鉱物がその底に沈んで堆まり，層構造ができています。その一部には，白金やクロムなどの有用元素が濃集しているところもあります。そこで，この層をつくる岩石について調べると，マグマが固まりつつあるときに起こっていた現象やそのしくみなどがわかります。当館では，このボーリングコア資料を用いて，顕微鏡での観察やＸ線分析による元素量の測定などによる研究を進めています。

収蔵庫に収納されたボーリングコア


マグマの中で結晶が沈積してできた輝岩

今回，田切教授からはグレートダイクのコア資料とともに，茨城県内外の岩石についての薄片（プレパラート）資料13,422枚も寄贈されました。これらの薄片資料は，地形図に採集地点がくわしく記録されており，田切教授や研究者の卵である学生たちの“血と汗と涙の結晶”ともいうべき貴重な資料です。

当館では，これらの貴重な資料を整理・保存し，積極的な活用を図っていきます。（資料課　小池　渉）

今年のサクラは満開！？ウソ本当！？

日本人はサクラが大好きです。もうすぐ花見シーズンということもあり，サクラの開花を楽しみにしている方も多いことでしょう。全国各地に人気の花見スポットがありますが，当館がかくれた花見スポットであることを皆さんはご存じでしょうか。特に花の谷のソメイヨシノ並木は４月初めに見ごろとなります。ところが，昨年のサクラの開花は今ひとつでした。その理由は何だったのでしょうか？

サクラの枝にとまるウソ

昨シーズンの冬から初春にかけて，博物館周辺ではウソが毎日のように観察され，好物のサクラの芽をその丈夫なくちばしでついばんでいました。紅色のウソの群れがとても美しく，少し早く花見を楽しんでいるような気持ちで観察していたのを記憶しています。

ところが，サクラにしてみるとウソの存在は脅威であるかもしれないのです。１羽のウソの胃袋の中に300個ものサクラの芽が入っていたという報告もあるくらいですから，昨年のサクラの花の不調は，ウソが原因！？だったのかもしれません。

今年の冬は，博物館内でほとんどウソをみかけることがありませんでした。耳を澄ましても，「フィフィ」という口笛のようなウソ特有の鳴き声をきくことができませんでした。今年の冬は，山の木の実や花芽のつきが昨年より良かったのかもしれません。

ということは・・・。今年の博物館のサクラは，満開かもしれませんよ！？　（教育課　伊藤　誠）

トピックス

○茨城の自然報告会

総合調査の成果を調査員の生の声で伝えていただく「茨城の自然報告会」が１月13日に開催されました。当日は79人の参加者があり，会場の講座室は熱気に包まれました。そして細田浩司氏のオサムシ類の報告を皮切りに，午前中に動物分野，昼食をはさんで午後から植物分野と地学分野の報告がありました。安井さち子氏からは，八溝山地のコウモリ類に関する報告がありました。哺乳類を専門に調査する人以外は，コウモリの捕獲方法を知りません。参加者は，コウモリがどのように飛ぶか想像しながらかすみ網を仕掛けることなどを，興味津々で聞いていました。出井雅彦氏からは，珪藻に関する報告がありました。丸，楕円，三角，四角，五角，棒状…，多様な形に驚かされました。岡村典夫氏からは，夜空の明るさに関する報告がありました。茨城県の平野部でも天の川がみえることが分かりました。

報告会ではいろいろな分野の方々の話を聞くことができ，「茨城」をテーマに自然を調べるのにも，さまざまな切り口があることを再認識させられました。第２期総合調査は平成18年度より始まりました。次の報告会ではどのような報告が聞けるか，今から楽しみです。（資料課　久松正樹）

オサムシ類の報告をする細田浩司氏

○ヘラサギが菅生沼に初見参！！そして越冬・・・

毎年たくさんのコハクチョウやカモ類で賑わう冬の菅生沼に，今年は大変珍しい鳥『ヘラサギ』が来訪しました。ヘラサギは名前の通り，先が平たいスプーン状のくちばしが特徴ですが，サギ科ではなくトキ科の鳥です。日本には少数がごくまれにしか飛来しない冬鳥です。環境省のレッドデータリストでは，データが少ないため情報不足（DD）として扱われているほどです。

茨城県内では，公式記録がこれまで５例（1967年神栖市／2000年取手市など）しかなく，菅生沼に飛来したのも今回が初めてと思われます。

12月に飛来したヘラサギは，その長いへら状のくちばしを水中に深く差し入れ，首を盛んに振りながら水中を歩き回り，好物の小魚を上手に食べていました。警戒心の強い鳥とされていますが，静かな菅生沼で多くの水鳥といっしょに無事に冬を越すことができました。今回飛来したヘラサギは，写真からもわかるように翼の先端が黒く見えます。ヘラサギの成鳥は翼全体が白色であることから，幼鳥または若鳥と考えられています。次の冬も菅生沼に帰って来て，成長した様子を見せてくれるといいですね。（教育課　伊藤　誠）

菅生沼に飛来したヘラサギ　（撮影：石井光美氏）

○恐竜を組み立てよう！

第42回企画展「化石は楽しい！ー巨大恐竜からミクロの世界までー」では，マメンキサウルスとカルノタウルスの全身骨格標本（レプリカ）が展示されています。これらの標本は，企画展記念イベント「恐竜を組み立てよう！」で，一般参加者の協力によって完成したものです。たくさんの応募者のなかから，抽選で選ばれた50名の方々に企画展準備期間中の3月1日，2日に組み立てていただいたもので，組み立て作業と同時に，企画展の準備の様子も見学していただきました。

参加者からは「骨が組みあがり，恐竜が完成したときはとてもうれしかった。」「企画展準備の舞台裏を見学することができ，子どもにも印象に残るたのしい体験になった。」などの感想がありました。普段はみることができない博物館の裏側を少しだけでものぞいてもらえたのではないかと思います。（資料課　永瀬卓也）

カルノタウルスの組み立てを手伝う参加者

再生紙を使用しています。 PRINTED WITH SOYINK

内蒙古自治区博物館新館がオープン

内蒙古自治区博物館新館（左）と劇場（右），手前の鼎（かなえ）は中央政府から贈られた

ヌオエロサウルスの展示

元王朝時代のジオラマ

当館と姉妹館の関係にある中国内蒙古（うちもうこ）自治区博物館は，内蒙古自治区の成立60周年にあわせ，2007年８月１日に新館が仮開館しました。現在，管理部門，研究部門，収蔵庫，映像ホール，レストランなどの工事が行われており，2008年夏のシーズンにはすべての部門が完成する予定となっています。

新館の総床面積は58,000㎡（ちなみに当館の総床面積は11,995㎡，以下（　）内は当館の面積），これに室内駐車場1,000㎡が加わります。展示室は14,000㎡（3,188㎡）で，うち企画展示室は，1,000㎡（880㎡）と660㎡の２室を有しています。新館は展示，収蔵，来館者のためのレストラン・ショップ，事務，研究，警備，国際会議場，電気・水道・空調等，駐車場などの施設からなります。展示室は，２階が恐竜類やマンモスなどの古生物，動物剥製（はくせい）や押し葉標本などの現生動植物，鉱産資源，宇宙など自然科学，３階は歴史，民俗など人文科学，４階は騎馬（きば）民族，馬具（ばぐ），服飾（ふくしょく），美術などの展示となっています。

当館のシンボルとなっている松花江マンモスやヌオエロサウルスももちろん展示されています。また，内蒙古自治区は神舟５号，６号などの宇宙船の打上げ，回収地になっており，回収された宇宙船の実物なども展示されています。

入館料は，学校団体は無料で，一般は成人20元，学生10元（１元は約17円），開館から２ヶ月間で６万人を超える多くの来館者が訪れています。

（資料課　国府田良樹）

編集後記

自然博物館に勤務してもうすぐ１年になります。博物館の野外施設を何度か白一色にした厳しかった冬も終わりです。待ち遠しかった春ももうすぐ本番。去年の春に見惚れた桜が今年も咲き誇ってくれるでしょう。（I.K.）

[交通案内]

●常磐自動車道谷和原ICから20分
●つくばエクスプレス守谷駅下車
　～関東鉄道バス「岩井行き」又は「猿島行き」乗車
　～「自然博物館入口」下車，徒歩5分
●JR柏駅で東武野田線乗り換え，愛宕駅下車～茨城急行バス「岩井車庫行き」乗車～「自然博物館入口」下車，徒歩10分

[開館時間]

午前9時30分から
午後5時まで
（入館は4時30分まで）
※ペット及び遊具等のお持ち込みはご遠慮ください。

[入館料]

区　　分	本館・野外施設 企画展開催時	本館・野外施設 通常時	野外施設のみ	年間パスポート
大　　人	720円（580円）	520円（420円）	200円（100円）	1,500円
高校・大学生	440円（300円）	320円（200円）	100円（50円）	1,000円
小・中学生	140円（70円）	100円（50円）	50円（30円）	300円

（注）：（　）内は団体料金（20名以上）
未就学児・昭和13年4月1日以前に生まれた方（平成20年4月1日以降は満70歳以上の方）・障害者手帳をお持ちの方は入館無料です。
次の日の入館料は無料です。
●５月４日（みどりの日）　●６月５日（環境の日）
●11月13日（茨城県民の日）●春分の日
●高校生以下の児童・生徒は毎週土曜日
（ただし，春・夏・冬休み期間中を除きます。）

[休館日]

●毎週月曜日
※ただし，ゴールデンウィーク期間中の4月29日(火)～5月6日(火)は休まず開館し，5月7日(水)が休館となります。

自然博物館ニュース A·MUSEUM(ア・ミュージアム)
A-MUSEUM（AMUSEMENT+MUSEUM）

企画・編集：ミュージアムパーク茨城県自然博物館企画課／発行2008年3月25日
〒306-0622　茨城県坂東市大崎700番地　TEL0297-38-2000 FAX0297-38-1999
ＵＲＬ　http://www.nat.pref.ibaraki.jp/
E-mail　webmaster@nat.pref.ibaraki.jp
メールマガジンも配信中。登録はホームページから

ミュージアムパーク茨城県自然博物館は，誰もが親しめ，誰もが楽しめるア・ミュージアム（アミューズメント＋ミュージアム）をめざしています。